※長崎西南部の史蹟・名勝・天然記念物等の紹介通信

とはち通信

第　8　号

※一説によると、かつて長崎西南部一帯を総称して戸八ヶ浦（とはちがうら）と呼ばれた時期がありました。現在、この名は存在しませんが、長崎西南部に対する尊敬の念をこめてこのようなタイトルをつけてみました。

二〇〇八年 十二月 一日　落矢八郎

一枚の古写真…

現在、この写真（２ページ）は長崎大学附属図書館が所蔵しています。高鉾島を撮影したものなのですが、一体どのアングルから撮影したものなのでしょうか？何故か気になって仕方ありません。ということで調べてみました。今回はその話をしていきます…。

そもそもこの写真に気づいたのは平成十八（二〇〇六）年の秋でした。長崎大学附属図書館の幕末・明治期日本古写真コレクションを閲覧していると、一枚の写真が目に入ってきました。遠景は高鉾島、近景は石垣上に人が二人といった構図でしょうか。さらに高鉾島の奥には島みたいなものが二箇所写っています。一体どこから撮影したものなのか？　早速、私はこの疑問を晴らすべく調べてみました。私は土井首地区の出身なので、この写真の風景は見たことがあるような気がしました。すぐに思いついたのは白崎・上揚の二地区からのアングルでした。まずは白崎のバス停（下り線）から山手の住宅街に登って高鉾島方向を確認しました。古写真と似たようなアングルなので「間違いない！」と確信しましたが、すぐに疑問が頭をよぎりました。というのは、古写真には神崎台場跡のシルエットが写ってないのです。明らかに白崎地区からは写ってしまうのです。もちろん、上揚地区は白崎地区よりも南に位置するので、高鉾島を撮影すると神崎台場跡が写るのは言うまでもありません。一体どこから撮影したのか？　この疑問に対し、私は答えをだせず、一年以上の歳月が過ぎていきました…。しかし、最近になってこの写真は女神方向から撮影したものではないかと思うようになりました。が、今度も神崎台場跡が写ってくるのです。そして判明したことがありました。それは古写真の奥に写った島は伊王島であることが…。あとは神崎台場跡が写らないアングルを確保すれば完璧です。もう一度古写真を見ました。石垣上に人が二人・立札が一枚。これはもしかしたら台場の写真ではないか！　そう思った私はアングルの確認に行きました。が、神崎台場跡は草木が繁茂している状況で確認作業は容易ではありません。そこで、女神大橋からの確認作業に変更しました。注意点は二つ。一つめは伊王島の島の形状一致、二つめは古写真右手に神崎台場跡が写らないアングルの確認。以上に注意して検証作業をしました。まず、一つめですが、古写真の伊王島と橋上からのそれとはほぼ一致する結果が得られました。高鉾島の隣に伊王島が位置するアングルは橋上からも確認でき、撮影した方向はこの辺りの可能性が高いといえるでしょう。また、古写真の右手の島は神ノ島であることもわかりました。次に二つめの問題です。女神大橋上から見ると当然なのですが、神崎台場跡が手前にみえてしまいます。しかし、台場跡内から撮影していれば問題解決は可能です。神崎台場跡は天門峰（観音山）の裾野の先端部に建設された台場です。現在は神崎鼻と呼ばれていますが、この名のとおり少しばかり突出した地形を呈しています。この地形から撮影すると古写真のアングルが得られると私は考えます。そうすると、古写真に写っている石垣は台場の可能性が高いと言えるでしょう。撮影位置ですが、神崎台場は二回にわたり増築されました（在来御台場・新規御台場・増台場）。これから位置を推定すると、おそらく在来・新規・一ノ増・二ノ増・三ノ増台場跡および御石蔵跡の方向から撮影したことが推定されます。在来御台場跡からの検証を実施したかったのですが、現在、油槽所等の施設があるためできませんでした。個人的には高鉾島が低いアングルで撮影されていることから、在来・三ノ増台場跡辺りからの撮影ではないかと考えます。

以上が一枚の写真からみた私の感想です。現在、草木の繁茂により神崎台場跡からの検証作業は困難であると言いましたが、背景の島等を考慮するとここから撮影した可能性は極めて高いでしょう。もし、古写真に写っている石垣が台場の一部ならば、これは台場の解体以前の段階であり、石垣の築造状況等を知る上で大変貴重な写真であるといえます。

（文責　落矢八郎）

事務局
とはちろう
●ホームページ
とはちろうもしくはとはち通信で検索
●メール
h_ochiya@yahoo.co.jp

写真…高鉾島（長崎大学附属図書館所蔵）

幕末から明治にかけて高鉾島を中心とした写真は数多く撮影されました。この写真は絵葉書で手彩色が施されています。写真中央左が高鉾島で、その右隣が伊王島、さらにその右が神ノ島です。見えづらいのですが、高鉾島の左側にかすかな島陰を見せている島が沖ノ島です。戸町浦と写った高鉾島は有名ですが、この写真のように別のアングルから撮影した高鉾島は大変少なく、島の形状だけではなく、周囲の島などの状況がわかるので私にとっては大変貴重な写真です。この写真以外にも長崎大学附属図書館には高鉾島の写真がありますので、是非一度幕末・**「明治期日本古写真コレクション」**をホームページ閲覧してください。

この島の名称は、その昔、神功皇后が朝鮮半島へ出陣する際に島の形が瓊牙に似ていると言うことで、**とぼこ島→高向島→高鉾島**となったそうです。この辺りは神功皇后の伝説に関係しているようで、神ノ島や神崎などの地名についている「神」は神功皇后に由来したものだと言われています。長崎市外海町にある「神浦」もそれに因んだものと言われています。また、長崎市内には神崎も含め二箇所に神功皇后の**「鎮懐石」**伝説があります。

中世の高鉾島はキリスト教の宣教師を処刑した場所と言われています。外国の人からは「Papenberg」、殉教の島と呼ばれていました。近世には台場が建設され、異国船の警護のための要所として存在しました。この台場は合計三回にわたり建設・増設され、神崎台場と並び長崎湾の中でも重要な位置であったことがわかります。近代に入ると、長崎要塞の第二区線に指定されました。この他にも神崎・鎧崎（長崎市毛井首町）・野牛島（長崎市深堀町）、そして深浦（長崎市香焼町）があり、これらを結ぶ線が第二区線と言うことになります。

話は少し逸れましたが、高鉾島は各時代・時期を通し、長崎の歴史に登場する島であると言えるでしょう。この島だけではなく、長崎のすべての土地が、その時々の人たちを静かに見守っているように見えるのは私だけでしょうか？

【引用・参考文献】

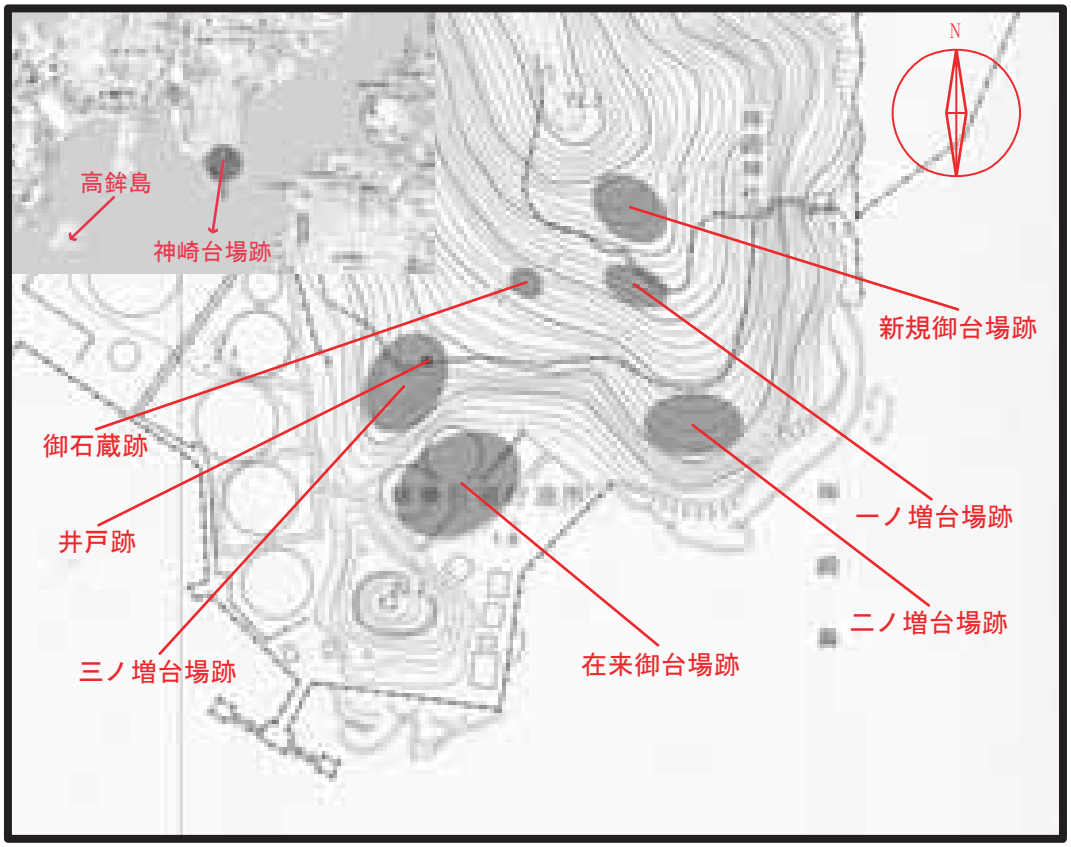
福田忠昭ほか　一九三八「高鉾島」『長崎市史』長崎市役所

写真上…女神大橋からみた高鉾島

古写真の構図になるべく近くなるように撮影してみました。手前の斜面は神崎台場になりますが、当時はこの中から撮影したと思われます。また、左下に見える白い円筒状の建物は油槽所関連の施設です。

写真下…神崎台場配置図

興味がある方は一度台場を訪ねてみてはいかがですか。



さらいてみれば…（落矢八郎アワー）

★こんにちは！

とはち通信も、はや第八号までできました。頭を掻きながら原稿を執筆してきましたが、まだ、自己紹介をしていませんでした。遅くなりましたが、ここで紹介をさせて頂きます。

私、落矢八郎は長崎南部の雄峰である八郎岳からその名を頂きました。子供の頃から八郎岳は目の前に聳え立ち、息を吸うかのように八郎岳は生活の一部分になっていました。頂上からの眺めは最高で、視界が良好なときは五島列島が見えます。頂にいると気分が穏やかになるぐらい八郎岳は登山者を気持ちよく迎えてくれます。また、土井首小・中学校の校歌にもその名が登場しますが、土井首地区の住民には無くてはならない存在だと思ってます（少し言い過ぎました、ごめんなさい）。

私は長崎南西部のすばらしさをみなさんにお伝えできないかと思い、『とはち通信』を書こうと決心しました。昭和三十年代から南西部は埋立などによって著しく変わりました。人間の生活向上のためには環境が変わるのは致しかたないのかもしれません…。しかし、変わるだけではいけない！　かつての南西部の姿を記録して後世に伝えていかなければならない！　と私、落矢八郎は考えます。ということで、始めたわけですが、これがなかなか難しい！思ったことを表現するのはそうそう上手くはいかないものですね。でも、私はメゲズにがんばります。可能な限り、月一のペースで紹介していくようにしますが、もしかしたら、二ヶ月に一あるいは三ヶ月に一かも知れません。地道に進んで行きますので、その時はご容赦下さい。

★落矢八郎のお供

私は取材する時はなるべく自転車を使用します。この自転車が写真を見ればわかるように何とママチャリ。でもと～っても乗りやすいですよ。姿勢が楽で、何と言っても荷物が入る！　しかもギアがついています（三段変速ですが…）。北は大浦方面、南は三和町ぐらいまでは何とかいけます。さすがに神ノ島方面は体力がもたないので、女神大橋が限界です。とにかくこれがなくては始まらない、私のお供（友）です。

取材のお供（お友？）

★落矢八郎の道具

道具を紹介します。

道具と言ってもたいしたものはありません。簡単に言いますと、状況を記録するデジタルカメラに三脚、筆記用具に帳面（ノートです）石碑などには拓本道具やその規模を測るためコンベックス（巻尺）を持参して行きます。あっ、そうそう。あとコンパス（方位磁針）と携帯電話も持っていきますよ。特に携帯電話は場所がわからない時に、ＧＰＳ機能を使って位置確認をするのにとても便利です。長崎石鍋記録会はこの方法が踏査の主流となっているそうです。

携帯電話（右）とコンパス（左）

★山と岳

南部の山を散策していると、ふとしたことに気づきました。○○山と□□岳の二つの呼び方があると（厳密に言えば△△峰もありました）。これはどうやって使い分けをしたのでしょうか？　全く勉強していない私にとってはよく判らないのが現状です。

山を見ていると、確かに険しい山とそうでないものとが存在します。例えば、小ヶ倉方面にある大久保山なのですが、遠くから見ると、なだらかな傾斜をしています。また、深堀の城山ですが、八郎岳の頂上からみるとなだらかです。これに対して八郎岳や戸町岳といった山は遠くから見ると、いかにも険しそうな山に見えます。要するになだらかな山は○○山、険しそうな山は□□岳と言ったことなのでしょうか？　でも魚見山は江戸～明治中ごろまでは魚見岳と表記されていました。考えると、頭が痛くなります。誰かわかる人がいましたら、是非教えて下さい。

★ジレンマ

最近、長崎要塞の標柱を調べています。拓本を上手にとることができません。拓本をとることに意味はないのですが、一応記録ということでとってます。単なるデータ撮りなのですが、「するのであればバッチリとりたい」のが心情です。気長にしていこうと思います。楽しみに待っててくださいね。